



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	大野, 栄三
Citation	教授学の探究, 27
Issue Date	2010-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42789
Type	other
File Information	kyouju27_001.pdf



巻 頭 言

大 野 栄 三

教育格差，学校格差，学力格差のように，教育の世界で「格差」を付した言葉が頻繁に使われている。ある人が受ける教育に，通う学校に，身につく学力に，class（社会の中の集団や階級），rank（明瞭な階層の中の位置），grade（成績や点数）がつけられていること，そしてそこに理不尽な差のあることが問題とされている。教育における「平等」と「公平」とは何かをあらためて真剣に考えなければならない時代である。

小学校高学年や中学校で習熟度別学習が行われている。本来，習熟度別学習は対症療法（その効果の程ははっきりしないが）であり，健全な教育がなされてきたなら必要がないはずの学習活動である。もしそうでなければ，習熟度で測定される学力に「格」差があつて当然ということになってしまう。しかし，何故にその習熟度の差が生じたのかが個々の学校で徹底的に追及されたという話は聞かないから，とにかく目の前の「格」差を何とかするのが先で，それで手一杯というのが実情なのだろう。

入学者選抜の難度によって，高校に「格」差がつけられていることは昔から周知のことである。教育予算をすべての高校に平等に分配するのは砂漠に水を撒くようなものだといわれ，特定の教育を充実させるためとして，選ばれた高校に重点的に予算が配分された。確かに，平等だけに固執することは賢明ではないが，入試難度の「格」でいえば，難関高校が選ばれていた（そもそも，いわゆる底辺高校は応募していない）。学校格差を拡大しないためには，「格」の下の高校にこそ適切な対応をしなければならなかったはずだが，教育困難校に多額の予算がまわされたという話は耳にしない。これが当時の「公平」であった。

ところで，授業プランにおける平等と公平とは何であろうか。今のところ，どのような教育条件下であっても，教育効果が同じように得られる授業プランというものは存在しない。したがって，同じ授業プランを全国の教室で平等に（同じように）実践することは不可能である。公平の観点から授業プランを考えなくてはならない。ここで，地域，学校，児童・生徒の実状に応じてという昔ながらの文言が登場するわけだが，公平に「応じる」ということについて，どのような研究がなされ，いかなる成果が蓄積されてきたのだろうか。本誌に掲載されてきた数々の論稿をふまえて，公平な授業プランについて考えたい。